

# 黒檜

北原白秋

青空文庫





# 序

黒檜の沈静なる、花塵をさまりて或は識るを得べきか。

薄明二年有半、我がこの境涯に住して、僅かにこの風懷を遣る。もとより病苦と闘つて敢て之に克たむとするにもあらず、幽暗を恃みて亦之を世に愬へむともあらず、ただ煙霞余情の裡、平生の和敬ひとへに我と我が好める道に終始したるのみ。

「黒檜」一巻、秘して寧ろ密かに我といつくしむべく、梓に上して些か我が真實の謬られむことをおそる。他に言ふところなし。

庚辰孟夏

白秋



## 上卷

熱ばむ菊

## 駿台月夜

照る月の冷さひえだかなるあかり戸に眼は凝こらしつつ盲しひてゆくなり

月読つきよみは光澄みつつ外とに坐ませりかく思ふ我や水の如ごとかる

## 朝

鶏かけの声けぶかき闇にたちにしがよく聴けば市の病院にして

お茶の水電車ひびくに朝早やも爽涼の空気感じあるなり

杏雲堂側面未明は暗き窓あけて混み合ひの屋根に霜の置く見つ

暁の窓にニコライ堂の円頂閣が見え看護婦は白し尿の瓶持てり

屋上の胸壁にして朝あがる一つの気球みつめつ我は

### 菊、その他の花

菊の鉢は我が家の子久吉爺の丹精になるものなり

逆光の玉の白菊仰臥に見つつはなげけやがて見ざらむ

我が眼先しろきに蘊む菊の香の硝子戸あけて乱れたるらし



視力とぼし掌てにさやりつつ白菊のおとろふる花の弁熱ばみぬ

影こぼひのみ匂やかなる窓まどぎはその花むらも暮きれて来きたりぬ

杏雲堂屋上展望

冬曇り明大の塔にこごりゐて一つ黝くろきは赤き旗ならむ

雲厚く冬は日ざしかとどこほる聖堂の黝くろき樹立きりうごかず

冬の日

失明を予断せられ、I眼科医院を出づ

犬の佇ち冬日黄に照る街角の何ぞはげしく我が眼には沁む

病院街冬の薄日に行く影の盲目づれらし曲りて消えぬ

### 鑑真和上

昭和十一年盛夏、多磨第一回全国大会の節に拝しまつりし唐招提寺は鑑真和上の像を思ふこと切なり

目の盲ひて幽かに坐しし仏像に日なか風ありて触りつつありき

盲ひはててなほし柔らとます目見に聖なにをか宿したまひし

唐寺の日なかの照りに物思はず勢ひし夏は眼も清みにけり

童女像の下にて

童女像朱の輝り霧らひ今朝見れば手に持つ葡萄その房見えす

焰だち林檎一つぞ燃えにける上皿一キロ自動計量器

或る画報を見て

両の眼を白く蔽へる兵ひとり見やる方だにおもほえなくに

降誕祭前夜

ニコライ堂頂閣青さび雲低しこの重庄は夜にか持ち越す

ニコライ堂この夜揺りかへり鳴る鐘の大ききあり小さきあり大ききあり

ある夜

暖房は後あとびえ冷きびし夜にさへや眼帯白くあてて寝むとす

鳥籠に黒き蔽布おほひをかけしめて灯ひは消しにけり今は寝ななむ

早春指頭吟

退院直後

花かともおどろきて見しよく見ればしろき八つ手のかへし陽びにして

我が宿よ冬日ぬくとき端居はしゐには隣もよろし松の音して

今朝見えて置く霜さへや我が眼には谷地田やちだも畦も隈黝くろみあり

冬、びしりと氷ひびく石くれは子こか打ちつけし沈みて止みぬ

瞼まぶたしめしつくづくとゐる冬日中ふゆひなか疊の目など見むはすべなし

眼を病めば起居たちゐをぐらし冬合歡ふゆねむの日ざしあたれる片枝かたえのみ見ゆ

折ふしに冬木見えくる眼先まなざきもたちまち暗し虚むなしかりけり

こがらしの背戸に音やむ小夜ふけて温罨法いづぎの息吹眼あに当つ

(吸入器にて)

## 冬日向

文鳥の影移りする鳥籠は日なたの軒にかけてこそ置け

蘭の香や冬は日向に面寄せてただにひとつの命養ふ

## 山鳥

木俣修より贈り来る

冬冷き皿の上には山鳥の臉しろし閉ぢしまなぶた

## 冬光無し

高空に富士はま白き冬いよよ我が眼力敢なかりけり

眼を洗ふ冬光無しざふきぎ雑木々のいつひらきなむやは柔き若葉ぞ

眼にたのむ何ひとつなき芝庭の冬なりながら薄日照りたる

冬ひと日堪へてありしか池水のこほ氷れるめん面に風の吹き当つ

白き冬

冬みつぎ三月ただにましろく引くものに方丈の屏風ひだ襷冷えにけり

白きものまた白からじ立つひだ襷の六曲の屏風影もこそもて

我がみ冬しろき屏風に引きかけてラヂオの線の影も凍いてゐる

白磁はくじの八角の壺すぢの稜線すぢ引きてほの上うはひか光ひかるみ冬なるなり

眼とは閉ぢて睚毛まつげにさやる眼帯ひえの冷ひえきはみけり月夜ひえかも沁む

方丈冬夜

影かげさへや蓄つぼみは硬かたき冬の薔薇つばきただ三葉四葉の灯ひうつ映りにして

聴きき耳みみに胡桃くるみ食はみゐる影かげ我われは坐すわる太尾ふとをの栗鼠くりねにかも似る

何なにしらに灰搔かきならず夜のなぐさまぶれあやしく蠅はへかはばたく

手を当ててまたほてるなき鉄瓶てつびんの胴どうはじきつつすべな夜寒よごむは

春寒月夜三首



春立ちて月の幾夜ぞ雑木々の風騒ぐ枝に我が眼閃く

冬雑木こずゑほそきに照りいでて鏡の如く月坐せりとふ

父われに冴ゆる月夜を戸は鎖して書よみにけり女童この子

書齋後夜

万巻の書をい照らす灯うつりに鼠は啼くかさむき鼠は

夜の鼠小耳かき立て声も無しうしろけはひをうかがふらしき

古書の帙のぼる鼠の尾は引きて夜の咳に乱れたりけり

物の文繁あやしにし思もへばかいさぐる我が指頭ゆびさきに眼はのるごとし

### 春蘭

春蘭の冷ひやき葉叢はむらの香の蘊つつみ点滴てんてきの音は鉢との外とにあり

春蘭のかをる葉叢はむらに指入およびれ象かたちある花にひた触れむとす

### 片手

眼さきに

眼さきに片手さし寄せしはしはと見入るならひもおのづとなりぬ

能のなげきを

片手のみ眼にさしかぎし声は無し泣くなる姿こころには観よ

春夜寒

春夜寒<sup>よさむ</sup>白の小屏風超<sup>こ</sup>ゆとして面出<sup>つら</sup>す鼠声落ちにけり

風すごし愛<sup>かな</sup>しふたつのあなうらに赤外線<sup>ひ</sup>の燈は当てて寝む

早春五首

雪降りてしづけかりとふ朝庭に春の時雨か音わたり来<sup>く</sup>る

我が内障眼<sup>そこひ</sup>すべないたはり日も暗し春早き外<sup>と</sup>に土旋風<sup>つちつむじ</sup>巻く

春塵しゅんちんのいづ方となき日のまぎれ渡鳥わたりのこゑを聴くと切なり

水ぐるま春めく聴けば一方ひとかたにのる瀬の音もかがやくごとし

何知れず眩まばゆき雲やはげしくぞ眼をしばたたき我はありける

### 粉雪

朝の餉けの堆つみ朱しゆの膳ぜんに散らひ来る粉雪は松の揺りにたるらし

女童めわらはは雛祭るとぞ言問ひて朱あけの氈かもなど部屋へやに取りくに来

女めの子ころろに傾かしぐ思しは積たむ雪ゆきの枝えだしづりつつ春待はるまちちがてぬ

### 堇咲く

檜山に莖咲くとふその色のどれが莖ぞ見つつわかぬに

乾反葉ひそりばにまじる莖すみれをおぼつかかな陽炎をのみ見つつあやなし

玉蘭吟

まさに鳴く音はヒーカタカタなり

日方ひたまなとよ鶺啼はくれんくなり玉蘭はくれんのまだ蕾なる枝の揺れ見よ

玉蘭はくれんは空すがすがし光発ひとあさす一朝ひとあさにしてひらき満ちたる

木高きは現うつつあらぬか玉蘭はくれんの花多さはにしてむしろ幽かすけき

春<sup>しゅん</sup> 昼<sup>ちゆう</sup> はあやかしふかし 玉蘭<sup>はくれん</sup> の下照<sup>した</sup>る篋子<sup>えいし</sup>影<sup>かげ</sup>二人<sup>ふたり</sup>笑<sup>わら</sup>む

月の<sup>つき</sup>ごとく

観<sup>み</sup>るほどは敢<sup>あへ</sup>なかるらし日<sup>ひ</sup>を経<sup>へ</sup>りて物<sup>もの</sup>のあいろの暗<sup>く</sup>くなりゆく

日<sup>ひ</sup>の光<sup>ひかり</sup>月<sup>つき</sup>のごとくに 玉蘭<sup>はくれん</sup> の花<sup>はな</sup>さゆれつつあるが清<sup>すが</sup>しさ

我<sup>われ</sup>が眼<sup>まなこ</sup>には月<sup>つき</sup>の色<sup>いろ</sup>なる日<sup>ひ</sup>の照<sup>あ</sup>りを雀<sup>あひ</sup>歩<sup>り</sup>けり庭<sup>にわ</sup>片<sup>かた</sup>寄<sup>よ</sup>りに

玉蘭<sup>はくれん</sup> 散<sup>ち</sup>る

玉蘭<sup>はくれん</sup> は花<sup>はな</sup>うやうやし散<sup>ち</sup>るとして散<sup>ち</sup>りつつ冴<sup>さ</sup>えぬその下<sup>した</sup>枝<sup>えだ</sup>に

玉蘭<sup>はくれん</sup> は木<sup>こ</sup>末<sup>すえ</sup>より散<sup>ち</sup>りやすけらし下<sup>した</sup>枝<sup>えだ</sup>の花<sup>はな</sup>ぞ日<sup>ひ</sup>に照<sup>あ</sup>らひつつ

土に帰る時なりけらし 玉蘭はくれんのいや澄みまさる散りがたの花

花落ちてただち萌ゆるか 玉蘭はくれんの立枝たちえの芽ぶき雷いきはに勢ほふ

## 日光現像

### 春日籠居

春ふかむ隣家りんかのしろき花ひとき一樹透すいかげ影かげゆるゑにいよおもほゆ

春田中ねもごろ人のいふ聴けばげんげは遅し董いま咲く

承塵なげしには池の水照みでりの影ゆらぎまだ春早し鼠のをどり

註、水陽炎の影を壁鼠と云ふ

壺つぼにして影ぞおぼめけ盛る色の薔薇さうびとを見れば薔薇さうびとし見ゆ

籠鳥の揺りつつ遊ぶさま聴けば夕とのぐもり久しかるらし

### 篁子

春の陽に輝あき笑えまふ女の童わらはの外そとに置おきて思へや

女め童わらはを今朝出いだしやり午ひるまけて早や待ちがたし山辺かすむに

(受験の日)

### 春日すら



春日すら霞をぐらき雑木山木の芽もただにたちて匂ふを

雲といへば光恋こほしき玻璃の戸にあまりてしろく春は闌たけつつ

### 良寛遺愛の鞠

かねて懇望したりしかば、遂に越後長岡の知人よりやうやく届け来る。喜びかぎりなし。この鞠、見るからに円く稚く、赤と青とにてかがりたるが、手垢黒くついでいとめでたし。小函に入れ、その函の蓋には良寛遺愛の鞠、裏には第十七代の孫新木吟雨とあり。吟雨六十二翁は与板の人、蓋し良寛の父以南の実家新木氏の子孫なる由。乃ちその鞠の歌

その一

我が籠<sup>こも</sup>り楽しくもあるか春日さす君が手鞠をかたへ置きつつ

春ひねもす鞠のこもりの音聴くと幽<sup>かす</sup>かよ吾れの手触<sup>たふ</sup>り飽かなく

霞立つ永き春日を子どもらと手鞠つきつつこの日暮らしつ

良寛

乙宮<sup>おとみや</sup>の春はひねもす子どもらと手触<sup>たふ</sup>り遊びし君が鞠これ

何の香かこむる春野ぞ手もすまにつきて遊びし君が鞠これ

鉢<sup>はち</sup>の子と鞠といづれぞ陽にあてて鞠はすみれの花の香<sup>か</sup>のする

春日さす鞠はかなしもうつしとる感光板にうつら影引く

## その二

ぬくとさは縁えんの端居はしゐの春日向はるひなたわれも袂たもとの鞆たもととり出いだす

手に撫なでてつくづくと居れこの鞆たもとのかがりの綾あやは透あやかせど見えず

女童わらはがふふむ笑わらひはこの鞆たもとのかがりの手垢かな愛あなしがりつつ

手垢てあかつく君がが手鞆てまりのあや糸いとは赤あかしとを見えず青あおしともまた

春日向はるひなたぬくむ手鞆てまりは掌てにのせて綾あやは見えずもほの光ひかりりさす

聞くほどは人香ひとがこもらへこれの鞆たもと手触たふりすべなもなにかゆがみて

陽あかまぶたに明るあかまぶたる瞼まぶたさし寄せ嗅かぐぐ鞆たもとの影くろ駒こまきかもやかゆきこの鞆たもと

つきて見よ一二三四五六七八九の十、とをとをさめてまたはじまるを

良寛

つきて見む 一二三四五六七八九の十手もて数へてこれの手鞠を

霞立つかかる春日に子らとゐてつかしし鞠ぞいま手にはずむ

おぼつかかな鞠のありどの手を逸れて音なかりけり霞むこの昼

道

技びとや技に遊ぶといにしへは一生の命かけて愛惜みき

めでたかる世々の匠は言挙げずただ惚れるつその楽しみに

言<sup>こと</sup>さやぐけだし寒けし匂<sup>にお</sup>ふらく幽<sup>こ</sup>けききはぞ道<sup>みち</sup>に哭<sup>な</sup>かしむ

新万葉審査所懐、四首

和<sup>にぎ</sup>み魂<sup>たま</sup>樂<sup>が</sup>しみ思<sup>おも</sup>へば苦<sup>くる</sup>しくもただに言<sup>こと</sup>はまく言<sup>こと</sup>すらも無し

我<sup>われ</sup>敢<sup>あ</sup>て道<sup>みち</sup>に言<sup>こと</sup>はずも読<sup>よ</sup>み読<sup>よ</sup>みて盲<sup>めくら</sup>ひしふたつの眼<sup>まなこ</sup>かくあり

道<sup>みち</sup>により敢<sup>あ</sup>て樂<sup>が</sup>しと言<sup>こと</sup>はまくは樂<sup>が</sup>しびあまり声<sup>こゑ</sup>泣<sup>な</sup>かむかに

読<sup>よ</sup>み読<sup>よ</sup>みき選<sup>え</sup>び選<sup>え</sup>びきひたむきを眼<sup>まなこ</sup>は樂<sup>が</sup>しみき喰<sup>く</sup>ひ入<sup>い</sup>るまでに

千手

唐招提寺金堂追想

観音の千手の中に筆もたすみ手一つありき涙す我は

観世音像千手の指のことごとに眼坐しにき清みかがやかに

## 文珠

紫磨金の匂おだしき御座にして文珠の笑はてなかるらし

## 慶州石窟庵を憶ふ

本尊の石仏は悲願によつて日本海に正面したまひ、洞窟はその朝※の光により微妙に荘嚴せられたり

ひむがし  
東の海さしわたる朝日影石仏は坐しぬこよなき目見に

鑑真和上木像

再び唐招提寺の和上を憶ふ。芭蕉に句あり 若葉しておん眼の霰拭はばや

み眼は閉ぢておはししかなや面もちのなにか湛へて句へる笑を

雪柳

春邦画伯を訪ふ

輝るばかりたわわに匂ふ雪柳君が門辺は寒からなくに

咲きしだり匂清すみるる雪柳ただ白してふものにあらなくに

春夕

春ゆふべ眼に白らけゆく燠おきの色のもやはの柔きかなや火桶かい撫なづ  
そことなき春の蚊にすら聴くものは愛かなしかりけり若葉たをやぐ

雨後

水檐おもの若葉ほたほたと雨重おもり何ぞここすぢたく霰線引く

萱の根に鼠あらはれ小走りを此方こなた見しとふ我も其方そなた見る

春曇



糸檜葉いとひばにしろくこもらふ 春しゅん曇どんのこのかがやきは底しれぬなり

隣にて鳴く雛聴けば群れはしり眼は開あかぬもや若葉山吹

春昼一首

現身うつしみは春も背そびらの経けい絡らくに火をつづらせて愛かなしがるなり

註、経絡は灸の筋

初夏の庭

朝間あさま干す白ふすまき衾ふすまの日に照るは夜ににほふよりせつなかりけり

山吹の黄に咲きしだる色かとも見つつは籠こもれ若葉とも見ゆ

日おもての庭の此面このもの白つつじしづなが長なれや春酩たけなはに

### 盲目の蛙

草かはづごめや蛙かはづのこゑの、夜に聴けばくくとふくむ。おもしろよ盲目めしひの蛙、かいろ、くく、暗しとを啼く。盲しひぬ盲しひぬ、くくく。惜しや惜しや、くくく。すべな右すでに盲しひぬと、左の眼早やあやしとぞ。春の田のげんげの小田の、水みづのるや鋤あきかへし田を、その蛙、ころろ、かいろ、くくく、草かはづごもり暗しとぞ跳ぶ。をかしとよ、早や見えすとよ、後あとあし脚はねてまた水くぐる。

### 反歌

春の田の草間の蛙眼かはづをあけて啼くなるのみと子らは思はむ

## 田蛙

## 丘の翼家にて

眼は見えて啼くがままなる蛙かはづらに春雨はるあまづつみ風そよぎつつ

声あがる田居の蛙うへをを上居りて眼はふたぎある親蛙われは

## 背戸に出でて

春の田の柔やはら浅茅生風かざむき向を色走りつつ子らが追ひがてぬ

女め童わらはを手触りたふりなげかひげんげ田の春の日向は行き飽かぬかも

## 牡丹現像

## 1 庭にて

春の日の朱鷺色牡丹女童が跳ぶ足音に揺れつつ照りぬ

ほのあかき朱鷺の白羽の香の蘊み牡丹ぞと思ふ花は闌けつつ

## 2 病室にて

豊けきは葉ぐみとのふ牡丹のひと花紅き穩しきにして

香ひたつ朱鷺いろ牡丹籠にあふれ時計と置くにひと花しづか

葦つつむ幾重花びら内紅き朝の牡丹は食ままく柔ら

禿髮垂る黒きかほばせあどなくてあてなる際は物思はずらし  
かむろた きはものも

匂満ちて全けき牡丹二日まり我と在りしがくづれてちりぬ  
また ふつか

### 3 居間の縁にて

蕾添ふ黒き牡丹は一鉢の花重きから縁にさし置く

女童や穩し牡丹の靄だちを禿髮かき垂り父にゐずまふ  
めわらは おだ かむろ

牡丹の弁なごしくつつむ靄すらや我が眼先には揺れてくるしき  
まよき

## 庭の一隅

靄かきごもり層かきむ若葉の緑りよくこん 金ひとかたはただ一方を陽の照らふらし

うち層かきむ若葉くらきに子が遊ぶ鏡の反射そこらひらめく

### 初夏の灸点

影くろ黝てりむ照やすからず夏山のこの靄もやだち 立を我が眼おとろふ

よく点つきて当あたりかなしく柔らかき艾もぐさは妻が揉むべかるらし

火のうつり繁しじにし沁もぐさむる艾には蓬つゆの汁さきを先濡らしてむ

背は向けて灸やいとこらふる若葉どき妻が手たかり触しじの繁しじに来るかも

若葉照りいぶる艾もぐさは押しすゑて熱あつき三里がよくきくよくきく

## 五月霽

谷地やちの霽こむるかぎりは日の射して色おぎろなし若葉かも蒸す

霽ごめと香に蒸す緑くるしくて蛙は鳴くか声盛りあがる

おぼほしく若葉くろ黝くろずむこの眺め梅雨つゆのま待たず我が眼まなこ盲めくらひむか

若葉霽けふただならず爆弾機関銃弾漢口の空に火を噴くとふはや

激しく火を噴き墜つるたまゆらの機上いくばく幾いくばく干まなこを眼見まなこすゑし

## 浴湯一首

朝早やもたぎる風呂釜の湯を浴ぶとひたかぶる時し我適きにけり

夏山

朝鳥の声乱れ来る夏山は窓ひきあけてただちすすしさ

山蟬の翅かがやかす声聴けば合歡の若葉か最もをさなき

えごの花咲く

陽にまがふ何かしらけし眺めには若葉もわかずえごの鈴花

花しろきえごの木を日ごもりと手斧は音に楽しむごとし

人杖



女童めわらはは父が人づゑ蔓薔薇の白きは見つつ寄りて言ふかも

女童めわらはや香にほふ人づゑ肩触りてはずむ温ぬくみの艶いろひ母めく

女童めわらはは愛かなし人づゑ行かしめて行きつつ父ちちの笑あはれあかるを

## S

眼に触りてしらく匂ふは夏薔薇の揺りやはらかき空気なるらし

## ラヂオ朝暮

夏の鳥朝のラヂオに啼き乱りその山と思ふ滝津瀬鳴りぬ

夕待たず我が眼くらきに聴きほくる早慶戦もラヂオに止みぬ

犬の声ラヂオの中に群れ起り外に吠え継ぎて月の夜ふけぬ

多磨三周年歌会にて

睡蓮の花泛けりとふ池の面は日の照りつけて観る色も無し

な悲しみ霧りてをぐらき我が眼にももろもろの頭は光りて見ゆるに

弟の撮し来し水郷柳河と北支大同の映画を観る。天然色のそれらもありき

眼のうらに光る汲水場を蛇の奔る影さへすばやかにしか

石仏は正面向きおはし須臾に見る空現しけく涯なかりにし

光を

ひと度は相見まつりき縁えにしなり日光菩薩加護えにしあらせたまへ

物のはし黄金にあかる夕すらもただにし塵の舞ふと思へや

たまたま、道に出でて

夏菊のしろき籬まがきの角にして日のいちじるき光に遇ひぬ

曇れる魚眼

霖雨低唱

## 庭を觀つ

梅雨つゆの庭おほおほしきに鉄線蓮てつせんの花見えてゐてまた降りこめぬ

ふりこむる梅雨つゆは霖雨ながめの日ぐらしを硯すずりに向ひ書くこともなし

ふる雨にベンチ濡れるるそれのみの影なりながら眼には頼みき

谷地やちの水上かみと下しもとに瀨鳴りて気けごもり重しここの梅雨つゆどき時

日癖雨梅雨つゆはけ長しふきぶりとふりこむるきはぞむしろすがしき

木深くも繁しじに異なる物ことの雨まぶた瞼へだててひびくを聴けば

## 隣の松

梅雨つゆぐもり気重けおもき松まつや靄もごめと隣りんは邃ふかき色いろのこめつつ

隣の松、舞台の松に似たれば、お能の松と我が呼びならはしぬ

靄もごめや三階さんがいま松まつの塗ぬり笠かさの笠かさ揺ゆり畳たたみね今は梅雨つゆ時とき

蛙青し

森もりにひびき鳴なげる蛙かはづを梅雨つゆ早はややも茅ひぐらし蜩せみの声こゑのきざむかと聴きく

雨あまかへる日ひ中な啼なき継つぎ声こゑ速はやし矢やはず筈まゆみの根ねにひびかひぬ

白昼

我がほかは日の白光びやくくわうにこだましてラヂオ体操の響くあるのみ

暑しよの霞はてなきごとし熬いりつつやにいにい蝉の声沁むるかに

### 盲父子像

父八十三翁、四年前、手術の甲斐ありて幸に明を得たまひたれどこの頃再びよろし  
からず、我が視界も亦渾沌たり

ましらひげ白髯長かる父の目は盲しひて端然たんねんと坐ますに月押し照りき

父おいそこひの老内障眼はかなくなりましてひたすらと執とらす母の手なりき

立秋を白き木槿むくげの花咲きて見る眼すがしく開あきましし父や

閉ぢしみ眼ひらくただちを咲えき笑えまふ少女が面輪おもわこよなかりしと

老おいのみ眼とかく曇らへ年なれば早あきらや諦ちめておはすかよ父よ

そのごとも盲しふる子が眼を乞ひ禱のむと手触たふりなげかす父は子が眼を

盲しふる眼の梅雨つゆの霖雨ながめを日ぐらしと子は父を思ふ父は子を蓋けだし

父と子や霖雨ながめけなるき起おき臥ふしを盲しひつつ坐ますに盲しひにつつあり

## メンコン蛙

土もぐるメンコン蛙がへる眼ばかりを上のぞかせて吼ゆとふかなや

ラヂオにはメンコンがへる蛙くくみ啼き鳴る瀬のうつつ螢が飛ぶも

六月二十五日

茅ひぐらし鯛のこの日啼きそめ山やまかた方やまだ夕ゆゑあは淡き合ねむ歡のふさ花

雨けむる合歡すぢばなゆゑあはの条花夕淡きこの見おろしも今は暮れなむ

山寄り

小綬鶏の雛うち連れて過ぎりしはまだ朝かげの山寄りにして

小綬鶏の雛を守りもつつ降り行ける谷地やちをぞ思ふその夏霞



我が庭は莠はぐぎにまじる 桔梗きぢかうの紫しらけ朝から暑し

卓上の一鉢

朝顔は白く柔やはらにひらきゐて 葉はうつり映あをし蔓も濡れつつ

何なるや白くすずしくひらき来て朝顔の花といま匂ふもの

眼まなこかも蔓にはあらし 一ひとかた方と伸び向ふなり朝顔から絡む

水の音

ある日のラヂオ

苔清水ひびきつたふる幽かすかななる金閣寺の庭を我家わがやにぞ聴く

金閣は細みちよろろぐ水の音おとのただもはらなる夏の日にして

晩夏、 暇に想ふ

火のごとや夏は木こだか高く咲きのぼるのうぜんかづらありと思はむ

夏山は我が知る方の夕霧ひくひなに緋秧鶏飛びて風もつらしき

火

谷地の東宝撮影所、 日々に戦火起る

閑しづけきを人は戦ふ夏た闌けて模擬地雷火を爆た発せしむ

## 秋気

葉ごもりと合か躡ふかのうれの秋霧に尾長は居をらしその飛ぶ一羽

風の先さきつぎつぎと飛ぶ雛見れば尾長や秋を気け色しきだちたる

## 夕顔

眼まなちらから力ちからけだし敢あへなし夕顔の色見さだめむ睫まつげ毛触りたり

夕顔は端居はし居みの膳に見さだめて月より白し満ちひらきつつ

## 七夕

篋子の傍らにて

端溪たんけいの硯いに向ふ女めの童髮わらは黒う垂れて面照おもてりにけり

また磨らな硯いにうつる空のいろの消えつつしあるに墨の乾くに

よく磨らむ愛かなし女童めわらは七夕たなばたは磨る墨のいろの金きんに顕たつまで

端溪の硯いの魚眼ぎよがんすがしくて立秋はいま水のごとあり

### 残暑籠居

澄みつつし沁しむる暑さか西日さししづけき幹に蔦しひかり見ゆ

いよいよに濃く黒き眼鏡をかけて

うち沈む黒き微塵みぢんの照りにして暑しよは果しなし金きんの向日葵ひまはり

日中レコードのみをかく

何聴かむこの日のうちぞ指触およびふりあてゆく針との鋭とくも短かき

深大寺の九月

深大寺じんだいじ水多さはならし我が聴きくに早や涼しかる滝の音ひびく

むくろじの実のまだあをき庫裏の前もの申すこゑの我はありつつ

深大寺じんだいじの池、水澄みたらし下照りて紫金しこんの鯉の影行く見れば

御厨子みづしには倚像きざうの仏坐ましまして秋さなかなり響くせせらぎ

はてしらぬ仏の笑まゑひ面おもあかる灯映ひうつりにしてみ掌ての欠けたる  
ここの山我が聴かたく方かたゆ日照そぼえ雨して庫裏くり戸どに濡るる秋海棠の花

## 月色

雲とありて月の光の流らふる屋やの空ならし坐すわりて飽かず

子等がいふ欠くることなき望月も父我の眼にはふつかみか二日三日の月

風に見ゆる月の光を涼しくはにじり出でて仰げ暗きかも木々

薄雲にひらめく月の光かも風にかもあれや我が眼過よぎぬる

夜色をまた

月い照るかかかるか黝ぐろく厳いつかしき地表しゆんの皴しゆんを我が思もはなくに

山河てに輝こよひれる今宵まどの望月の円もけき思しへば我し盲しひにけり

秋夜父に読む

女めわらは童はの読よみとどこほり声無なきは灯ひに見みてかあらむ瞳こ凝こらすと

秋曇り

渡り鳥飛ぶとふ空も雨雲のいや降りつぎて暗くきかもただ

山椒太夫哀歌

安寿恋しやほうやれほ、厨子王恋しやほうやれほ

佐渡ヶ島さはた雑太の庄に目は盲ひて干すさ菫の粟の粒はや

啄つむ粟の薄日うすびあはれとほうやれと追ふ鳥すらや眼には見なくに

## 短日童女像

### 短日

短日たんじつは盲まふる眼先まなこに朱しゆの寂さびし童女像ありて暮れてゆきにけり

### 初冬月象



夜の池にうごきて織ほそき月形つきがたはかがやく籠へらのゑぐれる如し

夜のふけの冬の池水か黒くて深沈たるに月映りけり

鼠騒ぐ

田鼠ら硝子戸のぼりあわただし谷地やちの月夜も凍しみて明あかきか

物欲ほると鼠ほつい居る燈ひかげには霜こごる夜よの微動よがありぬ

夜々出いづる鼠ほひとつにこだはるは何ぞとも思おもへその尾引くなり

書画箋や鼠被かかぶる間まをおきて聴きくに穩おだや止みまた引き裂ききぬ

護摩壇に鼠むらがる夜半にして頼豪阿闍梨狂ひたまひき

## 冬夜

ラヂオには赤き翼つばさといふ曲の樂すすむなり夜よただ寒きに

篋子一錢新貨といふものを持てくる

冬夜さりひとつ光れる手に載せて吹きて見よちふ吹けば飛ぶ貨かね

鼠よあはれ

鼠あし子は後あとも見ざらしすると柱はしらに消えて夜寒よさむなるなり

## 雑魚

吉植庄亮君より送り来たる、二首

眼にさぐる雑魚ざこの熬いり煮には箸しつけて暗あきかもやあはれ霜しも夜よ燈とも火しび

冬ふゆざれの印いは旛は郡ほりゆ熬いりて来こし小蝦このひげが繁しじこごりけり

谷地の冬

藪やぶ雑ざ木こ谷地やちの日ひかげのしづけきは一朝いちにしもみ冬ふゆ寂さびびたる

小こ綬じゆ鷄けいの群ぐんれつつ黙つぐむ雑ざ木こ原はら冬ふゆは日ひすぢの目めに立たたずして

冬山

冬ふゆひと日ひなにかきこえてある山やまのまだしづかにて明あらなりける

瀬の音のひと日ひびかふ冬まけて鉄瓶の湯気我も立たしむ

冬むかふ谷地田の日かけ瀬の音して照る山方ぞす枯れはてたる

陽にあてて暁温もるほどほどは聴かゆる方の音きこえつつ

積むのみぞ冬の書塵のもろもろは我が読まずなりてすでにしづけき

### 落葉

玉蘭の落葉掻き集め焚く風呂のねもごろ柔き湯気に立つめり

我が山は落葉繁なり風呂立てて二十日まり焚きていまだ散り敷く

## 霜三首

大霜の田川ひびかふのみなるを我が聴きに出て朝は居りける

霜下りて近くなりたる冬山をあとりの声は繁しげくもぞ来くる

眼を開ひらき歩む林の小綬鶏は霜踏み越えて清すがしかるべし

## 愚かなる虎

讃岐金刀比羅宮の襖絵を思ひ出でて

虎の貌かほ啖らひ飽きたるさましてぞ愚かなりしかその眼とろめつ

猛たけ々だけし群虎の月に嘯うそくを呆ほけたるがひとり澗たに水みづなめぬ

## 読書

書<sup>ふみ</sup>読みて楽しかりにし昨<sup>きぞも</sup>思へば燠<sup>おき</sup>搔<sup>か</sup>きほぜり冬よるべなし

楽しみと書<sup>ふみ</sup>は読みしか味気なしゆとりとてあらず読<sup>よ</sup>むを聴<sup>き</sup>きつつ

書<sup>ふみ</sup>読みてひたり味ふしづけさを声ありやとも聴<sup>き</sup>きぬ霜夜は

読みさしてゆとりあるまのうら和<sup>な</sup>ぎや自<sup>し</sup>が楽しみと書<sup>ふみ</sup>は読<sup>よ</sup>みける

聴<sup>き</sup>きてあつ心に読<sup>よ</sup>むと沁<sup>ひ</sup>む文字の声ことごとく象<sup>かたち</sup>ありにし

## 妻

いたりける妻なるならしねもごろとかたへ寄りつつこの夜読みつぐ

我が二人<sup>ふたり</sup>いたりつくらし何くれと言<sup>こと</sup>には出でね依り合ふ思へば

聴くとして書<sup>ふみ</sup>読ませゆく気づまりも妻には思<sup>も</sup>はず心隔<sup>お</sup>かずも

家妻は心おきなし読<sup>ふみ</sup>む書<sup>ふみ</sup>の声ねむたげに落ちゆく聴けば

### 短日起居

口授<sup>くじゆ</sup>しつつうしろ寒けき短<sup>たん</sup>日<sup>じつ</sup>を懸<sup>かけ</sup>巢<sup>す</sup>は飛びてするどかりしか

その母の父とこもるにいつか来て子らはあるなり居るともなしに

### 飲食

おもほで  
面火照り炉ろに寄る子らが影見ればあかあかとけぶり煮立つものあり

ありやうは春あしたの朝あしたの飲おんじき食おんじきも色に見ずてはつひに寒けき

### 絵馬

山にして幽かすけかりしか薮しとみど戸しとみどに冬はここだくのち小さきめの絵馬

めの絵馬は掌てを合せる幼児に一刷毛の空を青く流しき

### 短日視野

眺めとて何の色なき冬山の雑木端山も見ずばさぶしき



冬山は雑木のかげり夕ゆふ早し灯ひを点つけよとぞ諸もろに点つけしむ

鼠と貂

明あかき燈ひに人ははばかり我が影を鼠きばと牙研ぎ嚙む音立てぬ

明みん笛てきの竹紙ちくしすらだに舌ねぶる鼠なりきや啖くひやぶりける

眼を開くをさな夜床の灯ほかけには鼠の法師大きかりにし

鉢の蘭くらひるにしか夜よの凍しみを障子ゆるがし鼠去りぬ

貂てんならむ我が冷えわぶる後夜ごやにして鼠ねひた追ふ音駈けめぐる

壁うらに食はるる鼠声啼けり飽くなき貂てんもはたや寒かる

冬夜さり鼠の業も果てけらし貂の眼も食に和むか

松風やさわたるらしき灯を消してその松の姿いまは見えつつ

### 寒夜

池水に黝くろき八つ手の葉はひたりなまじひに月夜見えてあるなり

うちみはり眼まなこうつろに居る我を月昼のごと照りて闌ふくるか

### 東宝撮影所

トーキーは夜の寒かんにして騎馬隊の蹄の音も撮とるにかあらむ

## 雪空

めらめらと火の燃えつきし幻覚も障子に消えて雪曇りなり

雪空の暗く閉ぢたる降り出でてことごとく白く楽しく舞ひぬ

我が堪へて<sup>まなぶた</sup>瞼たぎる日暮れ方雪はけはひに降り乱れつつ

一つ来て<sup>まぶた</sup>瞼に煮ゆる<sup>せつぺん</sup>雪片の須臾とどまらず水と<sup>た</sup>滴りにけり

<sup>まつげ</sup>睫毛より涙したたる両眼を映画にて見にきその大写し

## 観雪

<sup>からやま</sup>枯山に雪しらしらと降りるとふ枯山にすらも人目遊ぶを

降る雪に灯あかり向けしめその雪のほたほたと出でて飛ぶに胆きも冷ゆ

雪後

庭に観て眼もひらく今朝のよろこびは雪つもる木々の立体感なり

冬わたる紅腹べにはらうそ鶯は雪ぶりの後あとばれ晴にして声にこそ来め

瞳人語

年頭薄明吟

新春にひはると今朝たてまつる豊御酒とよみきのとよとありてまたたのたのと

父<sup>ちちはは</sup>母<sup>はは</sup>に寿詞<sup>よこと</sup>まうさく歳<sup>とし</sup>の旦<sup>あした</sup>仰<sup>あした</sup>ぎまみえむ視力<sup>しりき</sup>早<sup>はや</sup>や無し

ゑずまひに眼<sup>まなこ</sup>先<sup>さき</sup>貴<sup>あて</sup>なる杯<sup>さかづき</sup>やとよりと屠蘇<sup>とそ</sup>の注<sup>つ</sup>がれたるかに

汝<sup>なえ</sup>兄<sup>あに</sup>今は屠蘇<sup>とそ</sup>も召<sup>よ</sup>さぬかあはれよと母<sup>はは</sup>嘆<sup>なげ</sup>かすやしづけき我<sup>われ</sup>を

弟<sup>おと</sup>どもが酒<sup>さけ</sup>に吼<sup>こゑ</sup>ゆるを寿詞<sup>よこと</sup>とも元日<sup>よひ</sup>は聴<sup>き</sup>け日<sup>ひ</sup>もかたむきぬ

### 木魚と明笛

人より贈られて

妻<sup>つま</sup>を呼<sup>よ</sup>ぶ小<sup>ち</sup>さき木魚<sup>こぎょ</sup>は掌<sup>て</sup>に据<sup>す</sup>ゑてうつによろしも足<sup>あし</sup>音<sup>ね</sup>ちかづく

呼<sup>よ</sup>ぶとしてたたく木魚<sup>こぎょ</sup>も見<sup>み</sup>えぬ外<sup>と</sup>に手元<sup>てもと</sup>逸<sup>そ</sup>れつつ畳<sup>たたみ</sup>をうちぬ

## S

明<sup>みんてき</sup>笛はひやるろほろろと吹きいでてすべしらぬかなや指<sup>や</sup>を遣るすべ

指<sup>および</sup>触り冬は頼めし明笛の竹紙<sup>ちくし</sup>のつよき張りぞひびらぐ

## 春寒

春早やも蛙鳴きそめ幾夜さか真闇つづきて月ほそく出<sup>で</sup>ぬ

へうへらと蟄<sup>ひき</sup>は土より音<sup>ね</sup>哭きして春なりけりや月夜はつかに

世は献金の盛りなるに

ほそき金何ぞ秘むやと夜を覚めて妻に訊きゐつをさな臺の音

夜哭きする食用蛙風にゐて 春寒なれや咽喉つづかず

或る絵をもらひて

夜は暗し皿なる鱒氷れるが片照る青き脊すぢそろへぬ

## 鼠の春

冴えかへる

蘭の香に寒波押し来る夜の闇や春酣といふに間はあり

春蘭の根に置く卵殻なるを鼠は出でて触れゐるらしき

春蘭の鉢跳びおりる夜の鼠そのひと跳びの尾は冴えかへる

春夜寒

鼠出てもこりと居るは畳目のけばをかひろふ夜寒灯あかり

承塵に水月のかげのぼるとき鼠は居りき面を出だして

註、承塵は長押

電燈のコード咬み切るふてぶてし鼠彼奴は感ぜぬらしき

温ときは鼠らしきが小走りに体あたりして早や消えしなり



冷えまさる闇に目を瞑とぢ我が居ればおのれ鼠の親なるごとし

闇にゐる鼠思へば立つ鬚に眼のするどかる啼く音引くなり

春惜む

春惜む我が方丈の闇にしてさうさうと群るる鼠しば暫あり

薄眼にぞ走る鼠の影追ひて何すとならし春も暮るるに

梁うつぱりや春来てかじる野鼠のおもしろと聴けばなほと居るなり

風狂

歳時記をかじる鼠はげんげ田の畔あぜをかも来こらすその日がへりを

花さぐる鼠わじやう和上わじやうは身ぐるみに濡れてかまさめ春雨な降り

## 朧

春朧ろかがむ鼠のをさなきはもろて両肢持ちそへ物ふふみ食はむ

朧ろうげつ月の匂おもてふ面おもてを行く刻み定刻九時四十分の時報今う点つ

## 花塵

牡丹しろく香を吐く夜々はかげ陰のみを鼠跳梁し早や在らずあはれ

花塵くわちんをさまりてかす幽けく暑くなるものかうつはり梁うつはりを走る鼠すら無し

## 春山

百千鳥聴くによろしき春山も眺むるにしかずこれの霞を

聴くになほ匂ふ霞か春山のわたりの野鳥羽ぶりしじなり

そこらくは萌ゆる端山はやまの藪やぶ雑木ざつぼく春の鳴る瀬のかがよひにけり

盲しひむより見る眼まされり楽しみとただに聴けとふ何のなぐさめ

色に見ずもただに聴けとふ明らなる両眼にして人言ひにけり

聴くものに春はのどけきの鑿みかな昼の鼠のそことなきこゑ

## 春日

鶯かはつに蛙鳴かはつきつぐ庭ありて我が春しゅんじつ日は果はてなきごとし

三度、鑑真和上を憶ふ

盲しひてなほ淨慧じやうゑの人は明あけし面おももちしろく春を寂さびてぞ

瞳人語

聊齋志異の瞳人を思ひあはせて

のんのんと瞳の中に言ふ聴けば春しゅんちゆう昼ちゆうにして花か咲きたる

夜にまさる黒き眼鏡の視野にして桜の花はひらきそめにし

## 靖国神社を偲びて、一首

映画には桜浮び出揺れるしが影日向ありて真昼なりにし

## 塑像を置く縁にて

風はまだ繁し<sup>しじ</sup>らけ立つ 春<sup>しゅん</sup>塵<sup>ちん</sup>に眼洗<sup>まなこ</sup>はむ朝<sup>あした</sup>とてなし

立ちにけり空<sup>くう</sup>にさまよふあるかなき春の蚊すらも眼は持つらしき

我が塑像ふくらみ黒き<sup>まぶた</sup>瞼<sup>まぶた</sup>に夕<sup>ゆふ</sup>柔<sup>やは</sup>らなる春陽<sup>はるび</sup>かぎろふ

## 短歌新聞百号の祝に

百と積むけだし稀なり香<sup>かぐ</sup>の果の影さへや然り歌に敢て積む

人ならば百に垂なんなん翁にて言ひてめでたし新聞を君は

### 暗夜行

夜行くはむしろ安けしひと色と見つつ馴れにし闇の眼にして

真ま闇やみにはまぎらふ光あらずにまなぶた瞼まなぶた慧としにほひのみして

闇いとど春しゅん夜やは愛かなしこの道のほふかぎりを聞きて行くがね

ガソリン・コールドター・材き香が・沈しん丁ていと感かじ来きて春しゅん繁しげしもよ暗やみ夜よ行いくなり

春の夜と時計うごけるアトリエは表おもての闇やみも光かさげすごとし

土移る桜の花にありけらし夜風うごきて将たしづまりぬ

春しぐれ夜を行く人の間隔はけだしけはひに濡れて知りつつ

闇ながら戦せんまう盲めい寝ぬる家の棟は蛙鳴く田をのぼりきりて見ゆ

夜目にして黒きはふかき藤浪のしだれたりけり隣家りんかなるらし

物の和沈なぞむを聴けば草堀の春闌たけにつつ雨夜あまよひさしき

塙保己一を偲びて、一首

燈ひや消えし眼のあきらけきあはれとぞ沈痛に人の言ひて笑ひき

四度、鑑真和上を憶ふ

若葉しておん眼の雫ぬぐはばや

芭蕉

水檜の柔<sup>やは</sup>き嫩<sup>わか</sup>葉<sup>は</sup>はみ眼にして花よりもなほや白う匂はむ

藤と牡丹

一

豊けくや匂ふ藤浪房垂れてひと鉢の空をその色とせり

苔<sup>ふ</sup>みける短<sup>ふ</sup>かかりしか臍<sup>ふ</sup>たけて房ごとごと長き藤浪

糸づくり光る魚<sup>さ</sup>はすすしくて早や夏近し鉢の藤浪



触りよきは空にしだるる藤浪の下重りつつとどめたる房

牡丹の四方の明りはしづけて色無きがごとしこもる蚊のこゑ

白牡丹光発ちつつ和久し自界莊嚴の際にあらむか

陰にして紫紺の香ひすさまじき藤浪にあれや夜の灯闌けたる

藤浪は重りしだるる夜のしじま世界動乱の気先観むとす

## 二

隆太郎富山高校に入りてより早や四十日にもなりぬ

鉢の藤かかへ危ふきその母と畳にぞ下ろす房ゆらゆらに

ひと鉢を藤は老木おいきの片寄りに房しだれたり空むなしき椅子に

藤といへば早やも夏場所夕ゆふこめて鉄傘てつさんの揺ゆらぎラヂオとよもす

我が眼には黝くろきのみなる藤浪の散りかつ散りぬけ長き房を

鉢うづむ藤の散ちりばなひ花干からびて手に触るるほどは音に立つめり

### 惜春賦

花ひとつ片枝かたえに留とむる玉蘭はくれんの我が視野にして煙霞はてなし

裏端山うらはやま匂ふ霞のおほよそは聴きつつ居らむ聴かくに幽かすけき

春山はえごのしもとのとわたりをふ闌けつつかあらしきよろろ鶯

閑しづけさは春の蚊をすら羽ぶき澄む浅間の鷹のごとも聴き居つ

春すでにふ闌けてほけゆく紫雲英田は我が木戸過ぎて打越橋まで

下空に沈みかがやく花見えて我が夕闇は迫れるごとし

おもて表には月夜あかるき我が山を春のしぐれか背戸わたりゆく

## 黒檜

### 孟夏余情

黒き檜ひの沈静にして現うつしけき、花をさまりて後のちにこそ観め

か黝葉ぐろばにしづみて匂ふ夏霞若かる我は見つつ観ざりき

我が眼はや今はたとへば食しよくじん甚じんに秒はつかなる月のごときか

視ると聴くとそのいづれとふいよをかし視て而も聴くに豈まさらめや

我ならぬ言ひたやすかり縦よしや眼は耳に聴けちふ心に観よちふ

我が暗き人にここだきこゆるは勢きはふに似たり言ひて何せむ

馴れにけり暗き視界もよのつねはかくあるごとく見つつ安らに

春蟬 五月十六日

春蟬の早や鳴きそむる我が山を向ひにもこの日じじと声立つ

激しかる我が性をしも言撓めて堪へ堪へて居れ蟬の鳴きいづ

青蛙呼ぶ

若葉森に雨呼ぶ蛙湯に聴けば煙筒を揺りて声湧くごとし

郭公

野鳥レコード

郭公の録音聴くと櫛わか葉風あざやけき庭に眼は留む

眼もひらく初夏の清しさ我聴けりかつこうかつこうの光の録音

## 大暑

深かりし霧霽れゆきて谷地田やちだには月照れりとふ明日あすから暑し

靄もごもり大暑たいしよの照りのしづけきは寒むかるがごとし蝶はひらら居る

白しろ栄はえの靄もたちこむる真昼まひるにぞげんのしようこはよく煮立につらし

鳥猫たね大暑の照りに耳立てて蚊を追ふ見れば体たいかろく跳とぶ

## 茅蜩

茅ひぐらし蜩は合歡ねむの夕花ゆふはな咲きそむる山方やまかたにして気色けしき添そひつつ

雨とふる朝ひぐらしの声きけば常あるに似たり繁しげき杉山

東宝映画撮影所俯瞰

夏山に波の音荒く起りしがあはれあはれトーカーの模擬音にして

すべて模造花らし

夏撮うっす林檎の花は光れども現うっならねば早うっやあはれなり

夜の零時火星赤々と迫り来て模擬市たちまちにネオン消けしたり

街建てて夜々華やぎし今朝聴けばぐわらぐわらとすでに壊くっしつつあり

所懐二三

憤ることありて

反高そりだかの青かまきりを打つべくは一撃いちげきにしてその斧ともに

蟪蛄かまきりのはらわた頼めすぢ黒き針金虫の生くらくあはれ

樹相に寄せて

大き木の鬱然たるは然しかありてその雲吐けり年を経へにける

多磨運動会

短歌マラソンのともがらを、我家の方へ出しやるとて



日の透とほり影と乱るる秋ざくらよく見て来むぞ庭つきぬけて

庭なべて落葉のみなるありやうをこの風の陽に思ひみるべし

夕光ゆふかげの諸葉もろはかがよふ黄の銀杏わが腰掛は庭に置きたる

村童、あまりに現実的なる

眼にうとく我がつきそれし風船は童わらわが地よりさらひて逃げぬ

鉛筆の一二本ゆゑに我れがちと子らひた競ふあの駈けざまや

額髪

井上理吉夫人弔歌一首

額<sup>ぬかがみ</sup>髪の幼なかりにし俤<sup>いとせ</sup>は五十歳過ぎてその亡きあとも

### 冬の庭

玉蘭<sup>はくれん</sup>は黄葉<sup>もみぢから</sup>乾びし落ちはてて庭のはひりの音ひびきけり

夕かげはここだをぐらき我が眼にも楓<sup>かへで</sup>の紅葉<sup>ほでり</sup>火照するなり

日おもてに黄葉<sup>もみぢ</sup>はらく声するは日陰<sup>ひかげ</sup>の雑木風か吹き越す

背戸わきを我が蹴つまづくバケツには落葉かきためあかつきの霜

心の花五百号をことほぎて

おのがじし華は咲かせてゆたかなるみ園のあるじ今よき老おいに

我が園と眺め足らはす竹柏なぎの園牡丹の花も咲きて明るき

五百いほあまり華よろこびの慶積みましてなほかがやかしみ園は久に

### 篔子

女めの童わらわ篔はくわうこ子が削る鉛筆あかに朱あかき粉この飛び短たんじつ日ひいまは

灯ひのもとに篔はくわうこ子がすなる英習字菊きくさし寄せてその父ちちわれは

髪かみ揺りて父ちちに笑わらみ寄よる夜の寝ねぎは手のつめたきは少女しょうじよゆゑゑにぞ

### 榛名湯沢行

## 榛名

巔いたゞきの裏行く低き冬の雲榛名はるなの湖うみは山のうへの湖うみ

上つ毛榛名のみ湖雲うみのうへのいたゞきにして冬の陽映うつつす

雲過ぎて陽のあたりたる湖面には漁舟れふぶねひとつ見ゆとふかなや

榛名富士あか明く日あたり暖ぬくしとふ鬢櫛山びんぐしやまは早や白しとふ

はろばろに神楽きこゆる雲の上埴山はにやまひめ姫や巖いはの秀ほに坐ます

日すぢ降る雲こそ透けれ冬山榛名の宮はいや石高に

榛名の宮冬日薄きに妻と我が鶯笛を吹きつつ下る

この下りいまだ日のある山路とて残んの黄葉目にとまりつつ

上越線を湯沢へ、水上より

水上は屋群片寄る高岸に瀬の音ぞひびく冬陽さしつつ

こごしかる湯檜曾の村や片谿と日ざしたのめて冬はありつつ

岩ひとつ白かりしかなや冬谿水上の瀬は澄みにしかなや

短日の分水嶺に我が立てば一方へくだる水の瀬早し

上つ毛利根の水上我が越えてすでにぞくだる越の山がは

北の峽雲かひひたひたと押しかぶし降かうせつ雪ちかし紅葉も過ぎぬ

上つ毛は明あかき黄葉もみぢを越こしへ来てほとほと過ぎぬのこれる見れば

ふりさけて空に寒けき裾山を奥なる峯こもは隠りて見えす

### 湯沢の宿

山国はすでに雪待つ外そとがまへ簾垂りたり戸ごと鎖さしつつ

冬の宿屋内暗しゆやぬちきに人居りて木蓼またたび食はむかひそと木蓼またたび

父ととが曳しばつく柴積ぐるまみ車子ぐるまが乗りてその頬かぶり寒がり行きぬ

## 鯉市

鯉市ぞ本城寺前に立てりとふ早や短日を競りてあらむか

門川は黒きのみなる鯉生きて初冬の真水ほそりたりけり

雪降らむ雲は低きに荒々し山袴づれが真鯉競りあぐ

山びとが鯉を愛づるは常無くて徹り澄みたる姿観にけり

白鱗の三色の鯉の清けきは水中花とも澄みて真水に

観るものとはぐくむ鯉は常愛でてなほ思ふから色に出づちふ

水に澄む端巖の相これをかも豊けしといはむ鯉ぞ老いたる

生くらくは鯉市にしもしかもなほ青淵の鎮<sup>しづ</sup>み鯉<sup>い</sup>たちたり

黒の鯉三十六鱗みな張りて息ととのへれ寒<sup>かん</sup>きはまらむ

山国は冬のものなる鯉市も日の目みじかく数よまずけり

短<sup>たん</sup>日<sup>じつ</sup>の市の盥<sup>う</sup>や手づかみと鯉は投げられ少くなりぬ

市はてて気<sup>け</sup>どほきごとし鯉あらぬせせらぎに菊のうつれる見れば

み湯のしりとりむお池の湯ごもりに息づきてあるか鯉<sup>い</sup>は老<sup>ふ</sup>けつつ

(高半旅館にて)

冬溪



風ひびく冬山岸にはららくは白樺の清き黄葉もみぢなりけり

冬山のつまさきあがり早や凍しみて日光ひかけはじかぬここだ石ころ

冬ふゆだに溪にこもるすぎもり栢森夕日さしかかる鎮しづみの雪を待つなり

山柿のここだ朱あかかる豆柿も正眼まぎめ仰ぎて色によむなし

手にひろふものの落葉はつくづくと眼まさきすがめて見るべかるらし

柴積しばづみは庭かけ置く霜ながらまだあををしひつちだ 田ひつちだの湯田

月夜

天の月川の瀬照らす更闌けてここにしぞ思ふ四方の鎮もり

潭水の自力発電の音澄みて飯士の山に月照りわたる

### 雪祭四章

穂積忠が処女歌集「雪祭」に寄せて

雪祭は睦月の神事

雪祭は睦月の神事、その雪は田の面の鎮め、雪こそは豊の年の、穂に穂積む稔のしるし、  
その雪を神に祈ると、その雪に神と遊ぶと、山峡や小峡の子らが、あな幽か、鬼の子鬼が、  
雪祭四方の鎮めと、幣立てて、小松植ゑてな、あな清けおもしろ、雪よ雪こんこよ、ハレ  
ヤとう、ヤソレたたらと、夜すがら遊ぶ。

## 反歌

天竜の水みなかみ上清み雪祭うからる族が鬼はよに遊びける

## 「雪祭」幽けきかも

「雪祭」幽かそけきかも、忠きよしはうれしきかも。その窓に富士を見さけて、狩野かのの瀬に月を仰ぎて、豊かなる心ばえやなほも、ほのぼのと朝夜あらし。ちちのみの父のみ身、ははそばの母のみ魂たま、老いませば、常無けばあはれ。風花かざばなや天城あまぎの杉を、うらら日を、何とはなくて吹きちらふその影にかも、心は寄する。

## 反歌

うら歎く父母の子は風花かざばなの消ぬけかに散らふ和なぎにかも行く

## おもしろい雪祭や

おもしろい雪祭や。風花かざばなの空そらに顕たちて、日和ひよりうららよとの。遠山とよやまは霜月祭しもつきまつり、新野にひのにては  
 睦月むつき、西浦にしうれは田楽でんがく、北設楽きたしだらは花祭はなまつりとよの。さてもめでたや、雪祭ゆきまつりのとりどり。国は  
 信濃しんのうよ三河遠江さんかえん、水みづは天竜てんりゆうの流なが、水上みなかみよ、下り下りに春はるうらかすむ。

## 反歌

春天あまぎ城雪じやうせきの鎮めと伊豆いずびとは何をもて遊ぶ歌をもて遊ぶ

## 神業ぞ雪祭

神業かむわざぞ雪祭ゆきまつり、鬼の子の出でて遊ぶは、ひたぶるぞ雪の上の田楽でんがく、鎮しづみこそ四方よもに響ひびく  
 に、まことのみぞ神と遊ぶに、おもしろとこれをや聴く、をかすとよそをや笑あはららぐ。な  
 巧みそ歌うたに遊ぶと、早はやや選えりりそ言ことのをかすと。心こころにぞはじめて満みちて、匂におひ出でるその外ほかな

らし。遊びつつ將<sup>は</sup>たや忘れよ、そのいのち命<sup>いのち</sup>とをせよ、穂積<sup>ほづみ</sup>の忠<sup>きよし</sup>。

反歌

神遊<sup>かみ</sup>び忘るるきはよ鬼の子がひたぶるに笑<sup>ゑ</sup>らく命とをあれ

利久居士

三百五十年遠忌によせて、その墓所、京の聚光院へ贈れる懐紙の歌一首

茶をわびと和<sup>わ</sup>敬<sup>きやう</sup>きよらに常ありてそのおのづから坐<sup>すわ</sup>りたまひき

春寒

池辺

池の面に匂へる影を雲ぞとは知らで過ぎしか今は見さだむ

池水に映る織ほそぐも雲あふぎみて霞むのみなるあはれ白雲

十方じつぱう射しゃくわう光霞むのみなる浮雲のまうへ照りつつ春なるかなや

門前新月

眼にとめて月のをさなさいふこゑはまかる人らし門かどの夜寒よさむに

月つき曆こよみ睦月むつき二日の新わかづき月の眉をさなかる西に見ゆとふ

白辛夷

春邦画伯の銀屏によせて

白<sup>しろこがし</sup>辛夷花さく枝にとまりたる頬白見れば春冴えにけり

春雷

春<sup>しゅんらい</sup>雷の行かそけかる夜なりけり寒餅<sup>かんもち</sup>の水の雫切らしむ

尾長

うち霞む三階<sup>さんがいまつ</sup>松の空にして尾長は喚<sup>よ</sup>ぶかその尾ひらめく

春山の松に群れ来る尾の長き空いろの鳥といふがめでたし

玉蘭唱

ひらきかけて黄にぞこごれる玉蘭はくれんは時ならぬ寒波かんば昨夜よべかいたりし

その母の子らかきおこす声きけば白木蓮はくれんの咲きて夜明よあけちかきか

玉蘭はくれんの花咲きてより来くる鳥の尾長・鸞うそ・鷓ひたき・雀なみみなあはれ

玉蘭はくれんの下照る土に歩めるは野の小綬せう鷄どりか長閑のどになり来し

### 庭の春日

春日照る庭の枯芝しづかやとただ白くもぞ観てを居りける

蝶の飛ぶ春なるかなと見てをるを小鳥ぞといふに微笑ほほえみ尽きず



春日照る庭の芝生を鷄とりじもの我は搔しらきをり白けたる芝

冬ふゆ 早ひでり 長かるあひだ乾からび来し雑ぜいふの落葉もはららき失せぬ

うちしらけ色無き芝生下萌えず日は春にして眼霧まぎらひ泣かゆ

うち見には枯からやま 山芝生春日照りねもごろ聞けば濃すみれ咲きぬ

吾が犬の呆ほけてあくなき寝ざまにうらら春日の照りこそなごめ

春といへば菓子などめして犬じもの我の坐ましけり渴くものから

口出づる「おぼこ」のどかや用のない煙草たばこ売など春はふれて来くる

我がこもり春は匂へば照り美くはし物のあいろよ強ひてしも見ず

## 転居近づく

成城十九番地月まどかなる 春しゅん夕せきの暮れつつはありて明あかりつつあり

花ひとつ枝にとどめぬ 玉はくれん蘭の夏むかふなり我も移らむ

## 下巻

### 日本古武道

昭和十三年九月十五日独逸青少年使節団一行を迎へて、日本古武道型大会開かる、会場神田国民体育館、主催は日本文化聯盟なり、我視力乏しけれども行ききて參觀す

### 武神

建<sup>たけ</sup>御<sup>み</sup>雷<sup>かづち</sup>響<sup>な</sup>きわたらし夏雲やすでに向<sup>むか</sup>伏<sup>ふ</sup>す下<sup>しも</sup>つ国原

大船の香取の海に潮うしほとよみ弓弭輝りわたらす経津主ふつぬしの神

ひもろぎ香取の山は鷺多さばに梢とよめり清さやの明りを

荒み魂しかも和やはすと明らけし遠とほつ祖先みおやは討ちに討たしき

### 神前

神とある弓矢のまことうやうやしひとたび立ちてたぢろがめやも

劍執り闘ふかぎり齋庭ゆにはなり塵だにとめじ朝潔きよめつつ

### 武田流陣貝

陣員は裱正し高々と両手持ちにぞ吹きあげにけれもろて

陣員の法螺貝聴けば武者押しに今ぞ押しゆくあけくれ味爽あけくれの空

音おとに止やむ陣の法螺貝緋ぶさ垂りしづけかるかも吹きをさめける

### 立身流居合

真竹またけを立身たちみの居合抜く手見せずすぱりずんとぞ切りはなちける

見たりけり齋庭ゆにはに立つる青竹の試し切りこそうべな一と太刀

### 日置流弓術

#### その一

弓ゆがまへ構かまへや差さし矢やまへ前まへ型がたいぎとこそ片折かたり敷敷きぬ物見ものみ正ただしく

矢やを番つがへ物見ものみ安やすらぐ跼つくばひのよよに落居おちゐたる姿すがたよく見みむ

物見ものみししばしばししづももる際きはありてきりり引ひきししぼる張はりのよろししき

姿かまへなり構かまへ正ただしく張はる弓ゆづかの矢やと一ひとつなる心澄こころみみつつ

引ひく弓ゆづかはいよよ張はり詰つめ一筋ひとすぢや眼先まなこの鏃やじゆまで引ひく

満みを持もしてままさに射やはななすたまたまゆゆらは幽かすけかかるるらしらしふふるるへへつつ

詰つめいよよ張はりて堪たへたる右みぎ手の肱ひぢ矢や頃ころはよろよろししひひようようとはななししつつ

射てはなし見入る我かのしばらくは楽しきがごときいまだ名残なごりに

矢をはなしくるりと返る弓返りのゆがへのゆうかよろしも君が押手おしでに

的はいぎ神こころあき明らに引く弓の矢は音たてつ徹とほりたらしも

その二

矢継ぎ早に管矢継ぎ射るしばらくは矢筈あてゆくひまもなく見ゆくだやつ

つぎつぎと矢継早にぞ引く弓の弦ゆづるは鳴りぬしづけきまでに

甲矢乙矢射継ぎはなちてつく息の事なかりけり弓はをさめつはやおとや

剣道諸流

相むかひ声無き太刀の鋒きつせき鉞せきはむしろ凄まじき気合なるなり

気先きさきには撃つと見せつつまじろがず張り満つる力ちから極みなむとす

青眼せいがんにひたとつけたるしづかなる時たちにけりひらめく一太刀

真向まつかうより打ちおろす太刀雷撃のこの太刀風は息もつかせず

一太刀にひた打ちおろす、響あり何を思もはむぞ小手先のわざ

体あたりかららと絡からむ火のごとき気合つば鏢つばにして敢て押しにけり

白刃取極しらほとりむ捨身すてみの入り早し飛鳥の如くその手抑へぬ



## 柔道諸流

男童をわらべら構かまへ凛々しく肱立ててゐずまふ見れば張り切るごとし

母はいぎ国の童男をくなが相搏つと対むかひ構へぬ小さき柔やはら手

相むかふ今か搏うたんず面つらがまへ丹田にして気合満ちたる

えやと掛けおうと応こたふる張り満てる童わらべが気合相搏つかすでに

身をあげてすべて相搏つひたごころ童わらべなれや響き合ひにつつ

男童をわらべは稚なかるとも相搏つとひとたび対むかひ面おもてふらぬかも

手は疾はやし礼あやしてぞ退のくすなはちをじりりじりりと寄り身にはゆく

早<sup>はや</sup>技<sup>わざ</sup>とすくふただちのこのきまり<sup>おほそとがり</sup>大外刈<sup>おほそとがり</sup>の型のよろしき

師の道におのれ鍛ふとたじろがず力尽くしてその型学ぶ

### 天道流薙刀

薙刀<sup>ひとて</sup>の一手<sup>ひとて</sup>ひらめきいつくしき真夏なるなりしづもる塵に

しやつ小女童<sup>こめろ</sup>小太刀<sup>こめろ</sup>するどし老刀<sup>こめろ</sup>自の薙刀<sup>こめろ</sup>ぐるまたとうちとめぬ

### 根岸流手裏劍

十<sup>とを</sup>の指<sup>もろ</sup>諸<sup>たばさ</sup>に手<sup>たばさ</sup>挟む手裏劍<sup>たばさ</sup>のつきつき疾<sup>はや</sup>しうつ手<sup>たばさ</sup>は見えず

手裏の技神わざにもかもや的の戸にうちし小柄は我われと礼みやし抜く

### 夢想流杖術

天地あめつちに構かまふる杖ぢやうの音無ねなきはただ水のごとし無念無想の型

杖ぢやうの手は眼にもとまらず引くと見せ打つと返すと十方じっぽう無礙むげなり

### 武道

青雲おをぐもに直ただにひびかふ劍つるぎ太刀た古いにしへありきいまもこの道

### 戦時雑唱

### 鋒鉞

靖光は陸軍省贈の将官刀なり。征戦一ケ年、而も我眼を病みて今為す無し

晴はれけふを暗きかもやとうちなげきひたと瞻もり居りわが太刀靖光やすみつ

父の子はつくづくと見よ我が太刀と鞘さやはらふ太刀に曇りひとつ無し

一ひと方かたに力あつむる我が眼先鋒鉞まごきほうばうの蒼み光さ発し見ゆ

### 哀歌

ひたひたと攀とちてうばへる墨とりにて何を叫びしつはもの彼ら

つはものはあへぐいまはもをたけびてこゑあげにけむ天皇陛下万歳

先き駆くとただに勢いきほふ軍の犬ひとたび吼えてかへらざりけり

伝書鳩荒野の空に行き消えてたより無しとふその鳩泣かゆ

斃れ伏す軍馬あはれと我が水のひとしづくつけて死にし兵はや

この感激を

昭和十三年九月廿六日、大日本聯合青年団第十四回大会に際して、秩父宮殿下には会場日本青年館に台臨あらせられ、畏くも令旨を賜ふ。一同感激措く能はず、我また席末を忝うすれども、眼疾の篤きをもつて幽かにただ拝し奉るのみ。この日、我が新作大日本青年団々歌初めて合唱さる

澄みわたりいよよ静けき時今を宮成らすらしみ気配聴かゆ

金屏の映えて畏き真正面に宮おはすらしあたりしづけき

秩父嶺に神立ちわたる朝の雲み声いさぎよし若き直の宮

朗かと国の若らに下したぶ力雄々しきみ声なるはや

聞えあげ応へまつれる人誰ぞ涙せきあへずその声歎歎

みそなはせ天もとよめとけふ今ぞ声揺りあがる大日本青年団の歌

## 老兵

### その一 応召

昭和十三年五月、応召兵我家に宿る。その中にひとりの老兵ありき

老いし兵<sup>わらひ</sup>笑落しつかきかぞへ<sup>ひふみよいむなやここなたり</sup>一<sup>ひ</sup>二<sup>ふ</sup>三<sup>み</sup>四<sup>よ</sup>五<sup>い</sup>六<sup>む</sup>七<sup>な</sup>八<sup>や</sup>九<sup>こ</sup>人<sup>こなたり</sup>の子

召されけり老いし兵<sup>つはもの</sup>若やぐと面<sup>おもて</sup>もふらね多きかも子ら

小童<sup>がき</sup>らかよ末は名すらも忘れつと兵<sup>あし</sup>後言はず将<sup>は</sup>たや忘れし

老いし兵強き日差に歩を張れりむしろ叫びて駈けたかるべし

点呼なり若葉しづもる午<sup>ひる</sup>行くと兵は照る陽の地に灼<sup>や</sup>くる踏む

死ぬべくぞ兵は戦へかりそめと病みてな還り草も灼くるに

手もすまに養ふ蚕かなしびまた書かず兵が妻や 九人の母や

立つとして今は安きか兵彼ら生死の外に遊べるごとし

壺口の防毒マスク管長し若葉光るにをどり出て来る

蒸しむしと夜眼に撲ち来る土ほこりトラックとどろき兵発ちはじむ

その二 その家

初夏、我家に宿りし兵士の一人今既に中支に奮戦しつつあり、我等とその妻子との  
消息絶ゆることなし



兵の妻 九こなたり 人とふ子の母のまた細るらし家貧しきに

兵の家事に嘆なげたず貧しくも国を頼たのめて養かふ蚕こあげにき

山と言へば子ら 九こなたり 人母のみにかつかつ暮らす冬日ふゆびおもほゆ

兵の家いへ雑木端山ざふきはやまの後あと空も朝寒むからむ子らの騒さわぎて

前線に今ぞ発たつとふ文ありて生死しやうしもわかね戦勝たたかひちぬ

秋あきざくら花みだれゆく庭にして何くれとなく干す日はつづく

霜夜しもよ着をさる幼な小衾をがすまつ継つぎあてて仕立て送らな内うちのさがりを

小ぎれもの掻集かきつめ送る菰卷たまたねキャラメル九ここのつ

## 戦影

## 戦場の眼

じりじりと匍匐しつつも寄り進む兵をぞ思ふその  
眼まなちから力

ひたおもて戦車にあるはまじろがずその眼射たれけりふた両つのその眼

銃つ向けて壕がうに押し並なむ鉄兜眼には堪たふるか待つある時を

動うぜぬはいよよ見据みうと塹ざんにして未だは射たず敵引き寄せぬ

## 白昼に思ふ

日のさかりまなこ眼射たれて聴きにける兵の命の四方よものしづもり

夜戦

夜戦よいくさは月をこもれば黍の根に鳴き澄む虫のその翅はすら見む

眼先まなざきに友の屍凍しかばねれるを月夜つくよ堪へつつ七夜ななよ経しとふ

廃馬

ましぐらに進み行きける軍ぐんのあと馬絆切こときれぬ草は喰みつつ

砲火絶え今はあやなき夜の沼に馬沈まらずまた嘶きて

盲兵春日

ひと棟は盲目のみなる兵にして真昼明きに坐りてありしと

もの言はず光る戸口へ面向けて兵はありきと盲目なりしと

面あげし兵の一人はそれぞとふ眼も無かりきと見て来て言ひぬ

戦盲兵見て来しといふ人見れば眼はあきらけく頼むあるらし

### 戦聾

面笑ひ照る日に群るる兵見れば呆けたるがごとし耳聾ひにけり

夕河鹿また聴かざらし戦聾の幾人の兵青葉見てあり

空は見て答ふるなきは音絶えし兵の起居たちゐの性さがとやなりにし

爆撃音今は玄はるけくありぬらし聾兵は碁に余念無しとぞ

弔電二首

手嶋多賀美君の英霊に捧ぐ

つはものはかくしあるべし先行さきゆくと面おもてもふらず戦ひ死にぬ

ちちははは国に捧ぐとひとり子ごの愛児まなご先立さきだたし老いつつ言はず

若鷹

我が一族、陸軍航空兵少佐（当時大尉）鶴田静三君、昭和十三年初夏、南昌空中に於て散華す 九月十一日、郷里柳河にて葬儀盛大に行はる

我が族<sup>うから</sup>すでに一人はいさぎよくわうくわうと空に散りつつ消えぬ

夏空<sup>なつぞら</sup>を翼<sup>つばさ</sup>はらかなし錐揉むと激し若鷹<sup>まなこ</sup>眼見据ゑき

誉<sup>よ</sup>とぞ世人<sup>よひと</sup>讚<sup>ほ</sup>へむ我<sup>わ</sup>も然<sup>さ</sup>りその老いし父<sup>ちち</sup>も厳<sup>いづ</sup>かしくあらむ

電送歌<sup>でんそうか</sup>口授<sup>くしゆ</sup>し勢<sup>きほ</sup>ひし今出でて秋草<sup>あきくさ</sup>の中にうづくまりぬる

故郷<sup>ふるさと</sup>や今日<sup>けふ</sup>し響<sup>とよ</sup>まむ秋草<sup>あきくさ</sup>の闌<sup>た</sup>けて閑<sup>しづ</sup>けきかかる日差<sup>ひざし</sup>を

## 長江夜話

見る見る<sup>くろ</sup>黝<sup>くろ</sup>き蝗<sup>くろ</sup>の大<sup>たい</sup>群<sup>ぐん</sup>の空<sup>く</sup>おほひ来<sup>く</sup>る恐<sup>く</sup>れを言<sup>く</sup>ひぬ

長江の大き出水は見るさへや空をのみ映<sup>うつ</sup>し白<sup>つ</sup>き積<sup>み</sup>雲<sup>ぐも</sup>

或る船員

揚子江遡江しつつも夜<sup>よ</sup>ふけには耳<sup>みみ</sup>に入り来<sup>く</sup>と後<sup>うしろ</sup>引<sup>ひ</sup>く波

下航する夜<sup>よ</sup>のおそろしき言<sup>い</sup>ひにけり兵<sup>へい</sup>揚<sup>あ</sup>げて来<sup>く</sup>て後<sup>のち</sup>のむなしき

新秋を待つ

あますなき戦車爆撃を軍言<sup>いくさご</sup>ひて風<sup>かぜ</sup>つぶしに撃<sup>う</sup>ちに撃<sup>う</sup>ちにけり

ハルハ<sup>あした</sup> 哈爾哈河越え来てほろびたる蘇蒙の兵に<sup>はくや</sup> 白夜け長し

戦車<sup>く</sup>来る音のとどろを地に伏して待つま澄みつつ神<sup>しん</sup>はあるらむ

おほくさはら 大草原 沙塵捲きつつ響き来<sup>こ</sup>し百の戦車の骸<sup>がい</sup>燃えにけり

編隊機けだし進むは山<sup>やま</sup>形<sup>がた</sup>と列<sup>つらな</sup>並む雁の一機<sup>さき</sup>先かゆく

ノモンハン火を噴<sup>ふ</sup>き戦ふ国境の上<sup>じやうくう</sup> 空にして夏もをはるか

ホロンバイル夕<sup>ゆふ</sup>湖岸<sup>うなぎし</sup>にうつ砲の煙噴きつぎて未<sup>まだ</sup>し暑からむ

掃射戦のすさまじかりし後<sup>あと</sup>冷えてパン焼き車<sup>にほひ</sup>香立てつと

国境線敢て守りてしづかなる月夜にしあるか笛を吹きつつ



口をつくハロンアルシャンといふ語韻ひびき新秋にして我も癒えなむ  
 波濤の歌人に寄せて

ながむらくしづけきがごしまともにとぞ敢てしぬぎて大き荒波

海洋図絵

辰の歳に寄せて、二首

竜巻の幾はしら立つ冥くらき海リーダーアの画ゑは影繁かりき

海を雲へ竜巻き騰あがる幾はしら覆くつがへる船は小さくゑがきつ

S

海洋の西洋木版画帆はんせん船描かき地球の円き弧線があはれ

S

コロンブスが卵立てをるその画など時に笑ましく思ふことあり

### 戦時立冬

めらめらと人馬も草も燬やきつくす火焰砲とふに冬ひた恐る

火焰砲重戦車ピアノ鋼線あはれあはれ子らが遊びも昂じ来にけり

戦はいつ止むとしもあらなくに米ひた惜む冬にぞ入りぬ

独居る暗き眼にして頼めたる一と擦りのマチの火すら惜みつ

ハルハ河あはれとしいふ言すらも冬来にけらし口を衝かずも

町に遇ふ小さき兵隊バンドには代用らしき締めてみ冬なり

S

北支那に砲とどろきし頃よりぞ目見闇くなりて我は籠りつ

内閣印刷局

かうがうし菊の御紋は透かし漉き人つつましも紙あつく漉く

閑しづけて偉おほき機構きこうの刷すりり出いづる百円ひゃくえん紙幣しひは現うしけなくに

長江ちやうかうの流ながもかくやたうたうと刷すりりいづる紙幣しひの清さやの洪おほ水みづ

国くにの紙幣しひ日ひを夜よをただにかく刷すりりて幾いく百億ひゃくいっぴやく円えん刷すりるにやあらむ

截たち切きるや刷すりる間まただちを香かに澄すみみて百円ひゃくえん紙幣しひ手ても切きれぬべし

うち羽はぶき常じょうにもがもな刷すりられゆく紙幣しひ夜よ昼ひるなし戦いく長さきに

五色旗ごしききの満州まんしゅう紙幣しひ手て童わらわがただに愛かなしぶものならなくに

紙幣しひ・債券しやうけん・印紙いんし・郵便貯金帳ゆうびんちゆうきんちやう虹にじなして刷すりりいづるところ人鼠にんねずなす

円陣えんじんに秘ひるる少女しょうじゆう鋭眼とめはや速はやく紙幣しひ検けんしをれ早はややおそれつつ

網の目の蟻なす花文けもんうつつしけき百円紙幣さつを指はじくなり

豊けかる退ひけて出づる子がゆふぐれは身のほそりして悲しかるべし

大御代と刷りいづる紙幣さつや我は見て大臣おとどのごとく闊ひろく歩みき

年の瀬一首

我が戦疑いくさふとにはあらなくに紀元二千五百九十九年の年の瀬今は

鉄を削る

前橋理研工場所見

機械とは将<sup>は</sup>たやしづけき鉄削る旋盤のかくも艶<sup>いろひ</sup>澄みつつ

複雑の単純化とふ一方<sup>ひとかた</sup>に機械はこころこめあるごとし

旋盤やひねもす速<sup>はや</sup>れ事といへばただにリングの幅<sup>はば</sup>削るのみ

旋盤に立つ微塵見れば鉄と鉄や触れあひのただち声いづるなり

鉄微塵短<sup>たんじつ</sup>日<sup>ひ</sup>にして現<sup>うつ</sup>しけき色盛りあがれ旋盤速<sup>はや</sup>む

冬といへば精密機械<sup>きぎき</sup>気先にもリングの寸分<sup>すんぶん</sup>ひた感じつつ

戦艦のピストンリング大きなるこの円<sup>えんりん</sup>輪に我はなごまむ

おなじ作業ただに繰り返すのみなるを愛<sup>かな</sup>し機械や倦みもせなくに

## 旋盤工は少年のみなり、一首

れうれうと子ら一つなれやリング削り単純にただにうごくを見れば

香にほくる鉄の微塵や気色けしきすら旋盤も人も別わきししらずも

## 黄塵

風荒れて黄つちに霾ちからす下つ空大さ年けさの初日ぞのぼる

国挙げて事に惑へりかくしてぞ年明けたりといふもおろかや

かきほぜる埋火すらに早や消けちて後継あとつぎ足さむ炭とてもなし

ゆゆしくも照りつつ降らぬ冬空の寒かんにもちこし水尽きむとぞ

我が観るはむしろ用なしけだしただ盲しひつつくらき眼にぞ堪へるむ

紀元二千六百年讃歌

読売新聞社募集奉讃歌選者吟

天あまぐも雲の青くたなびく大き陸くがかくいにしへも和やはしたまひき

大日本歌人協会奉祝歌集に

遥あまけくも今に澄みたる天あまの原その蒼雲ただに直ただむかふ我は



## 卷末に

本集『黒檜』は前集『溪流唱』（未完）に次ぐものである。

昭和十二年十一月、眼疾いよいよ昂じて、駿河台の杏雲堂病院に入院して以来、同十五年四月、砧の成城よりこの杉並の阿佐ヶ谷に転住するに至る、約二年有半の期間に於ける薄明吟の集成が之である。

収むるところ長歌五章短歌六百五十一首、之等がそのすべてである。

本来病中生活の吟詠であるゆゑ、自らの歌誌「多磨」以外にはさして発表せず、知らるることも欲しなかつた。ここにはじめて取りまとめて諸賢の清鑑を仰ぐのである。

此の集の歌は、別に選ぶところ無く、作したほどのものは洩れなくここに蒐めた。ただ一々に検して、その磨くべきは改めて磨き直した。

私の眼疾は遠因を肉体の上に加へた多年の精神的暴虐に発し、糖と蛋白との漏出が激甚となり、遂に、新万葉選歌に於ける日夜の苦業が眼底の出血と共に極度の視神経の衰弱を来し、失明直前の薄明状態に坐らねばならなくなつた。この一生の重患に於て、他に補う

てあまりある道の楽しみを得たことは、私の欣びである。私は寧ろ現在の境涯に於て幸せられてゐる。

本集は歌集であるゆゑ、作品にすべてを委ね、病気の経過その他心境の如何等に就いてはここに贅しない。短歌以外の詩作、或は随感、消息等は、各年度の白秋年纂「全貌」に全部を収録してある。

なほ、病中吟の外に、正統「郷土飛翔吟」その他の羈旅歌六百余首も、その後半期には氾濫した。しかし之等はその性質上前々集『夢殿』に収めてある。で、創作の順序歌風の推移に就いては、これも「全貌」によつて知つてほしく思ふ。その「全貌」にはこの『黒檜』の諸作も、原形のままに保存して置いた。異同も亦録したい考である。

終りに、此の集の中に時局の歌が少いのは、恰も発病が北支事變と同じ頃に當つて作歌の機を逸したのである。これは短歌作品のみならず他の詩歌にも禍した。甚だ残念に思ふがいづれ大成してその責を果したいと思ふ。ここには「戦時雑唱」としてその片鱗のみを示すにとどめた。

視力は一進一退して、今日に至つたが、やや小康を得て、薄明にも馴れた。ただ四方は暗くなりつつある。(昭和十五年七月廿四日夜)





# 青空文庫情報

底本：「歌集 黒檜」短歌新聞社文庫、短歌新聞社

1994（平成6）年8月25日初版発行

2002（平成14）年1月10日再版発行

底本の親本：「黒檜」八雲書林

1940（昭和15）年8月13日

初出：「黒檜」八雲書林

1940（昭和15）年8月13日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※小見出しよりもさらに下位の見出しには、注記しませんでした。

入力：岡村和彦

校正：光森裕樹

2014年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 黒檜

北原白秋

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>